

# 創造的破壊による革命 — シュンペーターのイノベーション —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

企業活動で呼号されているイノベーションには多種多様な定義があります。日本では1958年の経済白書で技術革新と翻訳され、高度経済成長に不可欠な新技術の開発が奨励されました。しかしイノベーションは技術の分野に限定されるものではありません。広義的には革新、刷新、変革などを意味しています。

イノベーションを世界で最初に理論化したのがヨーゼフ・シュンペーター（1883-1950）です。彼は若くしてイノベーションの重要性を指摘し、企業が情勢の変化に対応だけでなく主体的に変化を創造するように呼びかけました。

新型コロナウイルス感染症の災厄による経済的停滞がつづく中、新年も先が読みにくい状況です。シュンペーターの刺激的な提起は企業活動の新たな可能性を気づかせてくれるでしょう。

## 常識に囚われない新結合

シュンペーターはオーストリア・ハンガリー帝国、現在のチェコ共和国モラヴィア地方のトリューシュで生まれました。誕生した年はライバルである経済学の巨人ケインズが生まれた年であり、『資本論』を書いたマルクスが亡くなった年でもあります。父は織物工場の経営者、母は医者の娘で少年時代に父を亡くしています。

華やかな文化の都にあこがれてウィーン大学に進み、法学の博士号を取得します。その一方で

経済学に惹かれ、世界一の経済学者になることを夢見ていました。念願の大学教授になり、1908年に初の著書となる『理論経済学の本質と主要内容』を上梓します。レオン・ワルラスやアルフレッド・マーシャルなど一般均衡理論の経済学者に敬意



ヨーゼフ・シュンペーター

を表しながらも彼らがもつぱら経済の均衡に関心を示し、企業のダイナミックな技術革新などを経済理論に組み込まないことに不満を抱いていました。経済は静態的なものではなく動的なものであると考えていたからです。

29歳になった1912年、シュンペーターは精魂を傾けた『経済発展の理論』を発刊し、たちまち時代の寵児となります。同書でイノベーションを意味する新結合という言葉をはじめ使い、世界的な反響を呼びました。新結合とは従来の社会的常識に囚われない新たな組み合わせのことであり、企業が「経済活動の中で生産手段や資源、労働力などをそれまでとは異なる仕方で新結合すること」が経済成長の原動力になると主張しています。そして新結合は外部環境の変化から生まれるものではなく企業の内部から自発的に生まれるものと強調しています。新結合の目的は①新しい財貨の

生産②新しい生産方法の導入③新しい販路の開拓④新しい供給源の獲得⑤新しい組織の実現——という5項目に整理され、新しい財貨として独創的な新商品・新サービスを第一に掲げました。

## 馬車を何台つなげても

新結合によるイノベーションで忘れてはならないのは変化が非連続的に起きるということです。シュンペーターにとって「新結合こそまさに経済から自発的に生まれた非連続的な変化」であり、連続的な変化の積み重ねによる改良と明確に区別しました。イノベーションとは前例のない新たな方法で新たな価値を創造し、社会に劇的な変化をもたらす非連続的な行為です。シュンペーターは「馬車を何台つなげても汽車にはならない」という絶妙な比喩で非連続的な変化を印象づけました。

非連続的な変化は「古きものを破壊し、新しきものを創造して絶えず内部から経済行動を革命化する産業上の突然変異」でもあります。古きものから新しきものへの突然変異をシュンペーターは創造的破壊と表現しました。そして「資本主義の本分は創造的破壊である」として企業活動の中心に創造的破壊を位置づけています。

創造的破壊は自由な精神、挫折に耐え抜く意志、想像する歓びを併せ持つ企業家によって実行されます。シュンペーターは企業家を「常に革新を行って経済に新しい局面をもたらすような創造的な機能を持つ者」と定義しています。

企業家はイノベーションを実行する際に潤沢な資金を必要とします。しかしシュンペーターによると企業家があらかじめ資金を貯めておく必要はありません。銀行による信用貸し出しを受けて資金が捻出される信用創造を促しています。銀行の役割は企業家の才覚を見極め、リスクの担い手となって資金を提供することです。

瑞々しい気概に充ちた創造的破壊論は予想を上回る反響を呼びました。シュンペーターの名声は一気に高まり、アメリカのコロンビア大学から客員教授として招かれます。

第1次世界大戦終結後はオーストリア共和国の財務大臣に抜擢されました。続いてビーダーマン銀行の頭取に就任します。しかし経営危機に陥り、

頭取を解任され、巨額の借金を背負わされました。自分が実践家に向いていないことを思い知らされたシュンペーターはドイツのボン大学に赴任して研究活動に専念します。

## 進化する不滅の理論

ドイツではヒトラーによるナチズムの脅威が急激に高まっていました。シュンペーターは1927年、ハーバード大学に請われてアメリカに移住し、著作活動に精を出します。好況と不況の景気循環は不可避と説いた『景気循環の理論』に続いて1942年『資本主義・社会主義・民主主義』を刊行します。同書で「企業家の役割は価値の創出方法を変革し、革命をもたらすことである」と持論を展開する一方、大企業による市場の独占に警鐘を鳴らしています。創造的破壊の意欲が失われたらやがて資本主義は崩壊すると予測しました。

意外なことに出世作の『経済発展の理論』では社会主義をめざしたマルクスの理論に影響されていることを告白しています。同書の日本語版序文で「自分の考えや目的がマルクスの経済学を基礎にしていることは、はじめ気がつかなかった」と回想しています。

経済学の大家となったシュンペーターは計量経済学会や国際経済学会の会長に選出されます。ところが動脈硬化症を患い、66歳で急逝します。膨大な遺稿をもとに『経済分析の歴史』が1954年に出版されました。

彼のイノベーション理論は死後もさらに進化していきます。ハーバード・ビジネス・スクールで学んだ経営学者のクレイトン・クリステンセンは1997年の処女作『イノベーションのジレンマ』で「一見、関係なさそうな事柄を結びつける思考」と新結合をあらためて評価し、商品やサービスを徐々に改良していくことを持続的イノベーション、既存の市場を一新するほどインパクトのある試みを破壊的イノベーションと名づけました。

現代経営学の教祖として不滅の影響を持つドラッカーも『イノベーションと企業家精神』で「企業家とは秩序を破壊し、解体する者である。企業家の責務は創造的破壊である」と創造的破壊の継承者であることを明言しています。